

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 天守閣部会(第2回)

日時：平成29年6月15日(木) 10:00～12:00

場所：ウィルあいち 特別会議室

会 議 次 第

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 議事
 - (1) 第1回天守閣部会における主な指摘事項と対応状況について
 - (2) 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議(第6回保存活用計画検討会)の報告
 - (3) 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣部会(第21回)の報告
 - (4) 天守閣復元に係る基本計画書(案)について
- 4 その他
- 5 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 天守閣部会（第2回） 名簿

日時：平成29年6月15日（木）10:00～12:00

場所：ウィルあいち 特別会議室

（敬称略）

■ 構成員

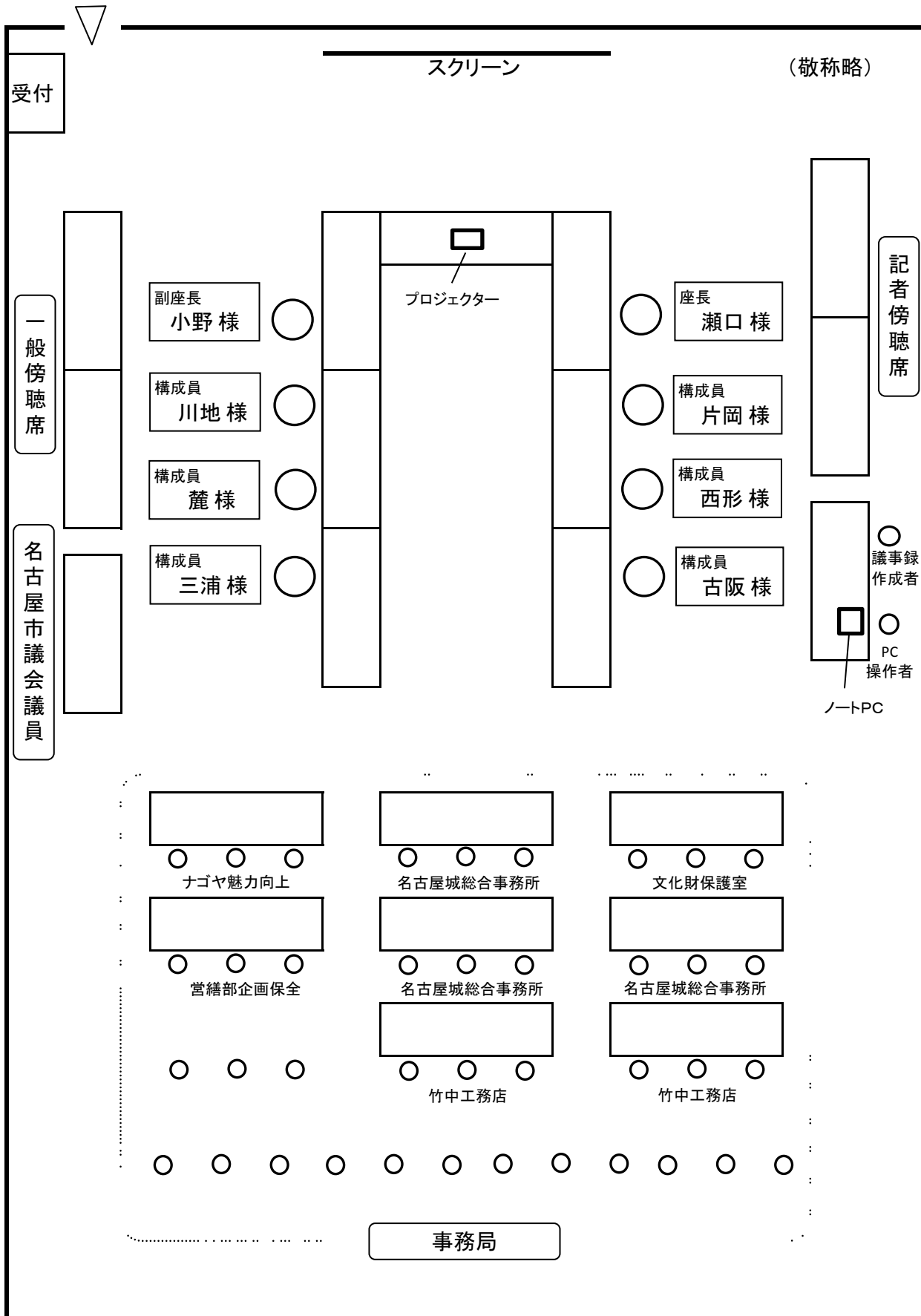
氏名	専門分野	所属等	出欠
小野 徹郎	建築学	名古屋工業大学名誉教授	出席
片岡 靖夫	建築学	中部大学名誉教授	出席
川地 正数	建築生産	川地建築設計室主宰	出席
瀬口 哲夫	近代建築史、まちづくり	名古屋市立大学名誉教授	出席
西形 達明	地盤工学	関西大学名誉教授	出席
麓 和善	建築史、文化財保存修理	名古屋工業大学大学院教授	出席
古阪 秀三	建築生産	立命館大学客員教授	出席
三浦 正幸	日本建築史、文化財学	広島大学大学院教授	出席

・ オブザーバー

氏名	所属等	出欠
洲崎 和宏	愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室室長補佐	欠席

座席表

平成29年6月15日(木)
10:00~
ウィルあいち



■特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（第1回天守閣部会）における主な指摘事項と対応

発言者	該当章	該当頁	主な指摘事項	対応
片岡	概要編 2 1-3	G2-010 ~015	構造架構について、近々に報告してもらえるのか。	7月開催の天守閣部会での説明を予定しています。
麓	資料編 1-1	S-009	昭和20年代の石垣積換えの実績報告書が、国(文化庁)に残っていないか、有無の確認をしてほしい。	文化庁の他、名古屋市、安藤ハザマ(当時、間組)に現在確認中です。
古阪	—	—	今回の復元事業について、写真や一般市民向けのいい読み物となるようなまとめ方を検討してほしい。	本事業の広報については、今後検討してまいります。
三浦	資料編 1-1	—	多額の予算のついた石垣の調査結果を市民に公開してほしい。寄付金などにもいいアピールになるはず。	本事業の広報については、今後検討してまいります。
三浦	資料編 1-1	S-005	「後藤家文書」「石垣秘伝之書」の勾配との検証と同時に、天守台石垣の隅石の下部が「あぶり出し」になっていることを含めて石垣の勾配の検証を行ってほしい。	第1回天守閣部会で配布した『名古屋城天守台石垣の調査(案)』で、「石垣詳細調査」の項目として「石垣の当初勾配調査」があります。その中で調査・検討していきます。
川地	資料編 1-1	S-031 ~035	資料間の不整合、くいちがいをどう判断していくのか。	資料の優先順位を検討し、それを元に不整合の検証をしていきます。
三浦	資料編 1-1	S-031 ~035	徳川美術館にあるという天守の古材を確認しておくこと。	「名古屋城旧天守梁部材」「名古屋城旧御蔵羽目板」(江戸時代17世紀 徳川林政史研究所蔵)について、平成22年に開催された『大名古屋城展』での展示実績が当該展覧会の図録より確認されました。(裏面参照)
古阪	天守台石垣の調査(案)	—	熊本地震のような想定外の直下型大地震がくれば、必ず石垣は崩れると思うが、対応をどのように考えるのか？	他の城郭での対応も含めて情報収集します。
三浦	天守台石垣の調査(案)	—	金城温古録に、西南の隅石の根石の南面に、「加藤肥後守の刻印があるけれども半分土に埋もれて見えない」という記録があるので、トレンチを掘る際に一緒に確認してほしい。	試掘調査の際に確認するようにします。
麓	工程案	—	不確定要素を今後どういうスケジュールで部会で決めていくのかスケジュール感が分からない。市よりこの回ではここまで決めないといけないと言ってほしい。	文化庁と協議中です。次回部会にて提示いたします。

名古屋城旧天守梁部材
名古屋城旧御蔵羽目板

江戸時代 十七世紀 徳川林政史研究所蔵

上は、天守の旧材として伝わった部材で、形状から梁の一部と考えられる。解体修理の際に取り替えられた部分が残されたと思われる。

下は、解体された城内の御蔵で使用された羽目板。どの蔵の部材であるかは判らない。「御蔵之内仕切羽め東表門御下 上より七 下ノ物」「此所筋鉄無」「ち七」「ち六」といった墨書の符丁があるため、再建時に再利用する予定だったと思われる。



長一四五・〇×幅四七・〇
×厚二〇・五



高三六・二×幅一六六・三
×厚五・七

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣部会（第21回）について

<石垣部会における構成員の主なご意見>

- 木造復元の工程を前提に、石垣についての検討を行うのは、特別史跡としての認識があまい。
- 石垣の取扱いの考え方（コンセプト）を明確にした方がよい。
- 市の計画は、天守閣を木造復元するために、石垣を取り外すことを前提としている。特別史跡において本質的価値を有する石垣を毀損する前提での計画はあり得ない。

<文化庁調査官のご意見>

- 現段階ではこの計画に基づく発掘調査は認められないが、石垣保全のための調査であれば認められる。調査の目的を明確にするように。

<今後について>

- 木造復元を進めるとともに、石垣を適切に維持・保全していく考えである。今後、有識者の方々や文化庁のご意見を踏まえて検討していきたい。

第8章

整備

- 8-1 整備の方向性
- 8-2 全体の整備の考え方
- 8-3 整備の方法

8-3 整備の方法

8-3-1 本丸地区

(2) 活用のための整備

■失われた建造物等の復元整備等

②天守の木造復元整備

<現在の天守閣の価値>

- ・現在の天守閣は、鉄骨鉄筋コンクリート造による再建から半世紀以上が経過しているが、次のような要因により、様々な価値を有する。

○建築物としての文化的価値

- ・昭和30年代当時の建築技術を現存建築物として現代に伝える
- ・焼失前に再現された外観により、地域の歴史的景観に寄与

○名古屋のシンボリック的存在

- ・事業費の約1/3もの寄附が集まるなど、復興のシンボルとして市民主導による

機

運の高まりにより再建が実現

- ・再建から半世紀以上の活用を経て、復興のシンボルから名古屋のシンボルへ

○市政70周年の目玉事業

- ・愛知県における観光文化の中心地を目指して再建

<現在の天守閣の活用>

- ・現在の天守閣は、空調など展示収蔵施設としての設備を有し、歴史や伝統を学習、伝承する歴史博物館として活用されている。

<現在の天守閣の課題>

- ・現在の天守閣は様々な価値を有するものの、耐震性能が現行の基準を著しく満たしていないことから、安全性の確保が喫緊の課題となっている。
- ・その他にもコンクリート中性化の進行に伴う耐久性の低下が懸念されていることや、経年による設備の老朽化など様々な問題が顕在化している。
- ・天守台石垣についても、孕みや戦災による石材の劣化などがみられ、特別史跡としての石垣の保存・修復を行っていく必要がある。

<安全性を確保する方法>

- ・喫緊の課題である安全性を確保するためには、天守閣を耐震改修する方法と建て替える方法がある。

<耐震改修>

- ・耐震改修をする方法としては、耐震壁の設置、耐震ブレースの設置、制震装置の設置、免震装置の設置などがあるが、現状の耐震性能が低いため大規模な補強を必要とする。

<建て替え>

- ・ 建て替える方法としては、現状のような鉄骨鉄筋コンクリート造による建替えや、建築基準法改正により可能となった木造により復元を行う方法がある。
- ・ 木造復元の場合、名古屋城天守については、『金城温古録』等の文献や絵図に加えて「昭和実測図」や「ガラス乾板」など、豊富な史料が残されているため、他には例を見ない史実に忠実な復元が可能である。

<木造復元の優位性>

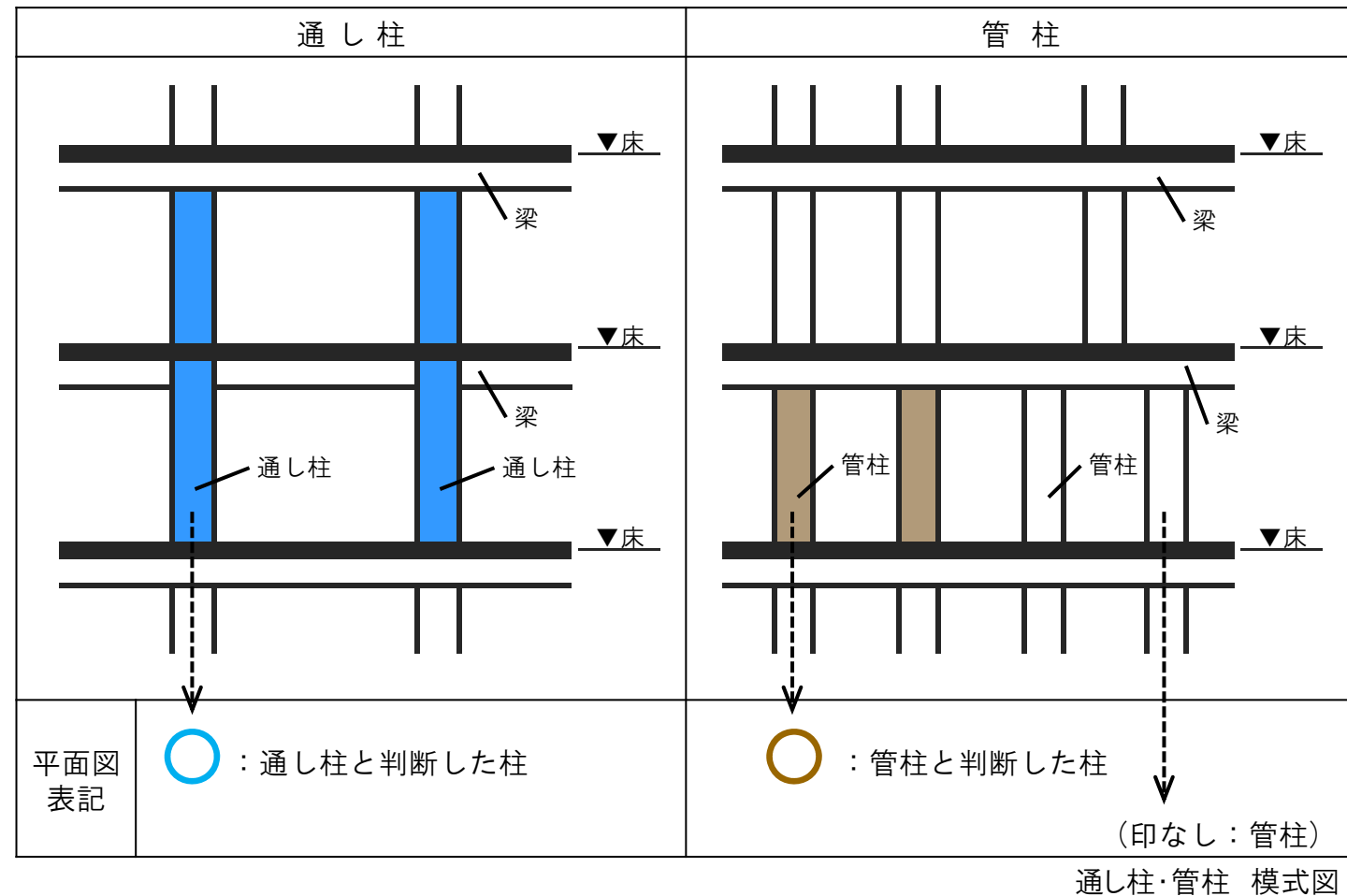
- ・ 耐震改修を実施した場合でも、また、さらにコンクリートの再アルカリ化を行ったとしても、進行してしまった鉄筋の腐食自体を基に戻すことは困難である。
- ・ また、日本における鉄筋コンクリート造建造物の歴史は 100 年程度であることから、数百年規模の長期にわたる維持保全は、現在の知見からは確立された対処方法はないと考えられる。
- ・ 一方、木造により復元した場合は一定の修繕等はあるものの、補修、修繕を繰り返すことにより建造物自体を維持保全してきた長い歴史があり、現存している木造建造物から判断すると、長期に渡り維持することが可能であると考えられる。
- ・ また、史実に忠実な木造復元を行うことは、現在復元整備中の本丸御殿と相まって、築城当初の遺構と共に歴史的、文化的空間をよみがえらせることとなり、特別史跡名古屋城の本質的価値を一層高めることができる。
- ・ さらに、文化観光都市としての魅力向上、次世代への伝統技術や歴史の伝承など、多角的な側面から意義がある。
- ・ 機運醸成については、市民 2 万人を対象とした名古屋城天守閣の整備に係るアンケート調査において、約 6 割が木造復元に賛成との結果を得ている。
- ・ これらの状況を踏まえ、顕在化している各課題を克服するだけでなく、特別史跡名古屋城跡の本質的価値をさらに高め、将来の日本の宝となるような文化財を目指すため、天守木造復元を進める。

通し柱とは

複数階を1本で貫く柱の事を「通し柱」と言う。

これに対し、一階分の高さしかない柱の事を「管柱(くだばしら)」と言う。

名古屋城天守の構造を検討する際にまず問題となるのが、どの柱が通し柱で、どの柱が管柱なのかという点である。



通し柱の検討の基本方針

焼失前の名古屋城を実見した2人の研究者が、通し柱の存在を報告している。

・齊田時太郎「名古屋城天守閣の耐震性に就て」

(『東京帝国大学地震研究所彙報』16巻1号 昭和13年3月)

「柱の大部分は各階毎に建てられ2層に亘る通し柱は極めて少数である。要するに、構造上各階単独のものが重層となつてゐると考へられる。」(下線引用者)

・城戸久『名古屋城史』(名古屋市役所 昭和34年)143頁(城戸久執筆担当部分)

「江戸時代天守に普通に見られるように二階分ごとに通柱として組んでゆく方法でもない。(中略)通柱を多く使用しないで各階建て登せの構造によって、この高大な天守を組上げた構造的技術は高く評価しなければならないところであろう。」(下線引用者)

齊田・城戸の両氏とも、大天守には少数ながら通し柱が存在した事を述べている。

しかし同時に、両氏とも柱の多くが管柱だった事を強調している。今回はこの両氏の見解を通し柱検討の起点に据える事とした。

従って、まず全ての柱を管柱と見なした上で、史料により通し柱の可能性が高いと判断した物を拾い上げる事とした。すなわち、通し柱と見なせる明確な史料が無い場合は全て管柱と判断した。

通し柱の検討に使った史料

通し柱の検討に際しては主に下記の3種の史料を用いた。判断する優先順位は①～③とした。

① ガラス乾板写真

写真で柱・梁の納まりが確認できれば、それが第一の判断根拠となる。

② 昭和実測図野帳

野帳には柱断面寸法が記載されているものがある。上下階で同じ位置にある柱について、明らかに上下階の寸法に相違があるものを管柱と判断した。

③ 昭和実測図

昭和実測図の、主として見上図の梁の描写などによって、柱・梁の納まりを判断した。

①～③から判断した検証結果と、下記史料の通し柱の情報を照合し、双方の妥当性を確認した。

④ 宝暦の大修理時の平面図「御天守地割図」

この図面の地階平面図に「朱丸付初重迄通ル柱」、1階平面図に「朱丸付二重迄通ル柱」との書き込みがあり、実際に一部の柱に朱丸で印がつけられている。これらの柱は、それぞれ地階から一階、一階から二階への通し柱を示している。

■天守（テンシュ）

慶長17年に創建され、昭和20年の戦災で焼失した天守。

■天守閣（テンシュカク）

昭和34年(1959)に再建された現在の天守閣。

※特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議(第6回 保存活用計画検討会) 用語集より

→ 今回の復元天守は、天守と呼ぶべき?天守閣と呼ぶべき?

■大天守（ダイテンシュ 又は オオテンシュ）

■小天守（ショウテンシュ 又は コテンシュ）

※『金城温古録』(『名古屋叢書続編 第十三巻』p.216)の記載に「天守の名は一にして、実は二楼を建るの法有り、名付て大(ヲホ)天守・小(コ)天守といふ。」

※『描かれた名古屋城、写された名古屋城』名古屋城総合事務所編集ではキャプションの振り仮名を「だいてんしゅ」

※名古屋市「昭和実測図 閲覧サービス」では図面名称に対し「だいてんしゅ」「しょうてんしゅ」と振り仮名されている

■橋台（ハンダイ）

大天守と小天守とつなぐ通路

■通し柱（トオシバシラ）

複数階を1本で貫く柱

■管柱（クダバシラ）

1階分の高さの柱

■復元原案（フクゲンゲンアン）

史実に基づき宝暦の大改修後の姿をまとめた案

■復元案（フクゲンアン）

現代的要素や施工条件等を加味した実際に建設する案

■復元（フクゲン）

失われた歴史的建造物等を、史実に基づき再建すること

■階（カイ）

内部の床を示す

※文化庁の『国宝・重要文化財建造物目録』の表記にならう。「層」と表現する場合がある。

■重（ジュウ）

外観の屋根の数を示す

※文化庁の『国宝・重要文化財建造物目録』の表記にならう。昭和実測図では「層」と記載されている。『金城温古録』では「重」と記載されている。

■地階（チカイ）

地下1階を示す

■穴蔵（アナグラ）

地階のこと

■金城温古録（キンジョウオンコロク）

尾張藩士奥村得義(かつよし)(1793~1862)とその養子定(さだめ)(1836~1918)が編集した10編64巻の名古屋城の記録

■ガラス乾板写真（ガラスカンパンシャシン）

昭和5年から17年に天守、櫓、門、本丸御殿など撮影した写真。640件(約760枚)あり、うち天守については焼失後の天守石垣を写した2枚を含む79枚が現存している。

■昭和実測図野帳（ショウワジツソクズヤチョウ）

昭和5年に宮内庁から名古屋市に下賜された以後、名古屋市土木部建築課による天守や本丸御殿等の細部を実測調査し記録したもの。大天守・小天守については279枚が現存している。

■昭和実測図（ショウワジツソクズ）

昭和20年の焼失前に調査、作成された野帳や拓本を元に昭和27年までに作成された282枚の清書図面。天守については大天守56枚、小天守15枚の計71枚の図面が作成されている。

■宝暦の大修理（ホウレキノダイシュウリ）

宝暦の大改修ともよぶ。宝暦2~5年(1752~1755)に天守の傾きを直すため、一部の屋根や壁・床を解体し西・北面の石垣を大々的に積み直す工事を行った。

2階から4階の屋根が瓦から銅板瓦に葺きかえ外観が大きく変更された。